資質・能力と部活動
生徒の全面的な成長を促す方法

開催日時：2023 年 8 月 18 日
16:00～18:00

河合塾×NOLTY プランナーズ

アーカイブ動画はこちら↑
（会員サイトへのログインが必要です）

第1部　基調講演

「社会で必要な資質･能力を育むためのキャリア教育とは」

筑波大学人間系（教育学域）教授

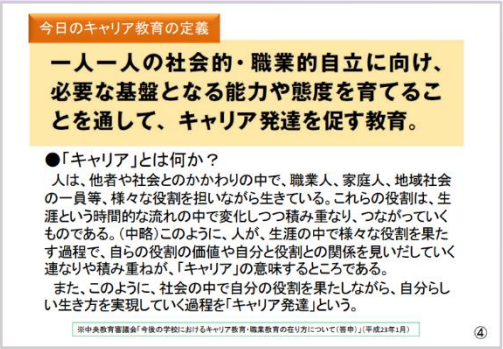
藤田　晃之　先生

専門領域は、キャリア教育の比較検討。
文部科学省　国立教育政策研究所での職務経験も持ち、
教育関連の国の政策や法令にも精通。

そもそも、キャリア教育とは何か

二十年以上前に登場した当初はニート･フリーター問題への対策として考えられたキャリア教育ですが、中学校での職場体験が中心となった時代などを経て、現在では「一人ひとりの社会的･職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とされています。特定の仕事に就くことを目指すようなものではなく、能力や態度を育てることが中心課題です。また、キャリアというのは、職業人であることだけでなく、家庭人であったり、地域社会の一員であったり、様々な役割をすべて含むものです。

私たちが社会でさまざまな役割を果たす上で、誰にとっても必要となる汎用性の高い力として、キャリア教育では「人間関係形成･社会形成能力」、「自己理解･自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つをあげます。社会でどんな仕事に就いても必要な力であり、家庭生活を営む上でも必要なこれらの力をどのように身に付けるかについて、「学校や地域の特色等に応じて育成されるべき」とされていることも非常に大切です。



今、なぜ基礎的･汎用的能力への期待が高まっているのか？

OECD の教育局長であるアンドレア･シュライヒャー氏は、多様な文化的背景をもつ他者と協力する必要のある社会に参加し得る力を育成することと、自主性とアイデンティティを確立するための支援を提供することが学校に求められていると言います。また、従来型の認知的スキルはデジタル化、自動化、アウトソーシング化が容易であり、現在の教育では知識を新たな状況に応用できることや他者とともに生活し仕事をするのに役立つ社会的な情動スキルをより重視する必要があると指摘しています。

国際 NGO の Center for Curriculum Redesign は、知識やデータを暗記することや整理することはアルゴリズムで代替可能でそれを使いこなせばよく、人間にしかできない専門的な知識、次なる学びにつなげる力、応用する力が必要になるとしています。

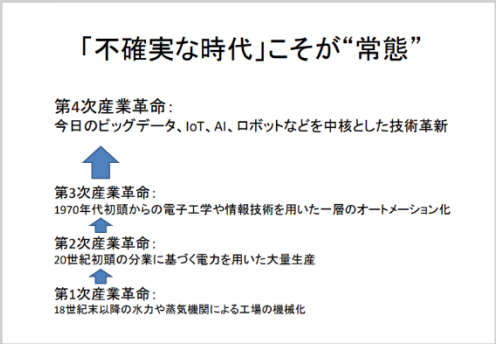
AI の登場を契機に、現在は世界の大きな転換期にあります。VUCA の時代という言葉は、世界全体が極めて予測困難な状況に直面しているという時代認識をあらわしています。大きな時代の変動の中で、変動･変化に対応して自分の人生を作り上げていくスキルが必要ということが、日本だけでなく世界中の教育改革の中で求められています。

V：Volatility（変動性）　U：Uncertainty（不確実性）　C：Complexity（複雑性）　A：Ambiguity（曖昧性）

実は、汎用的な資質能力はこれまでも必要だった

日本では Society5.0、世界では Industry4.0（第 4 次産業革命）と言われる中、ロボットや AI にこきつかわれる恐いイメージを持っている人もいると思います。しかし、これまでの産業革命を乗り越えてきたことを考えると、第 4 次産業革命も乗り越えることができると考えるのが普通でしょう。もちろん、乗り越えて来た当事者にとってそれらは大きな波でした。今まで信じていたものがガラガラと崩れ去る経験、信じていた理念や理想、社会的な前提が覆る経験がその度にありました。VUCA の時代は今に始まったことではないのです。

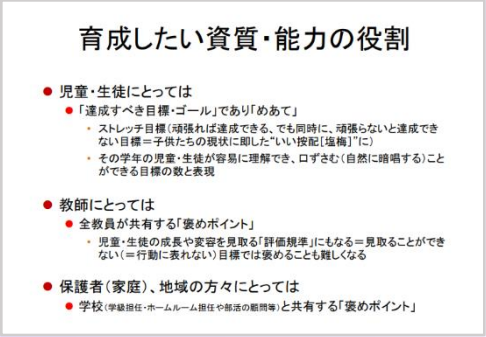
ピンポイントに特定のスキルに限定せず、さまざまな変化に対応しなければいけない状況は昔からあり、それに適応するための力は昔から求められていたということができるでしょう。



新しい学習指導要領が求めるキャリア教育の実践の在り方　―基礎的・汎用的能力をどう育てるか―

VUCA の時代にキャリア教育なんてできないという話もありますが、そんなことはありません。以前と比べて変化のスピードが劇的に早まっている中、重要な役割を担う基礎的・汎用的能力をどう育てればよいでしょうか。

①「何ができるようになるか」の観点



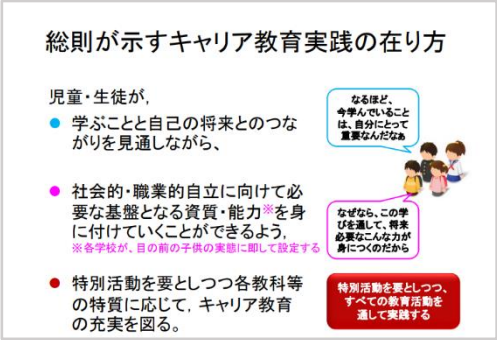
キャリア教育だけでなく資質・能力はすべて、それぞれの学校が目の前の子どもたちの実態を踏まえて具体の目標を設定し、設定した資質・能力を検証し改善をはかる、とされています。このことは小中学校から高等学校まで共通で、高等学校では加えてスクールポリシーを定めることも求められています。「うちの学校では 3 年間でこういう力をつける」ということを具体的に明示する必要があるということです。

すでに実施された意識調査やアンケート、学校評価、全国学力・学習状況調査のデータなどにも、ジェネリックスキルに関連する項目はあるはずです。それらを使って目の前の子どもの実態、スタートラインをつかみます。そして、今この子たちにとって最も必要な力が何かという議論の上に、ゴールラインを設定します。ゴールラインは具体的に行動にあらわれる力、評価できる力でつくることが大切です。育成したい資質・能力の役割は、子どもたちにとっては達成すべき目標・ゴールであり目あてです。目標がちゃんとしていれば、評価は難しくないはずです。具体的にしておくと PDCA サイクルが回しやすくなります。具体的にしておけば、認識を合わせて褒めることができます。褒めることは認めることであり、認めることは PDCA の第一歩です。

②「どのように学ぶか」の観点

「主体的な学び」では、自己のキャリア形成の方向性と関連付けることが言われますが、導き方を間違えると、「これは自分の人生に関係ないからやらない」といった視野の狭隘化に陥りがちです。それを防ぐためにも「対話的な学び」が必要となります。単にペアワーク・グループワークをすれば良いわけではないのです。「主体的で対話的で深い学び」がどのようなものか、意味を確認する段階がもしかすると抜けてしまっているかもしれません。

深い学びは、見方・考え方に寄与する学びです。キャリア教育は教科等の教育と社会をつなぐものともされますが、なぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身につくか、といった本質的な意義を理解するような教育実践が求められているわけです。



学習指導要領の総則が示すキャリア教育実践の在り方には、学ぶことと自己の将来のつながりを見通すことの重要性が示されています。そして特別活動を“要”として取り組むという中には、見通しを立て、振り返り、意欲につなげ、将来の生き方を考えることの大切さ、各教科や行事、部活動、地域での活動などを含むさまざまな活動をやりっぱなしにせず活用する、ということが込められているのです。

③「何を学ぶか」の観点

小中学校においては、「自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める」という点で、道徳での取り組みの占める割合が大きい可能性が高いです。高等学校において中核的機能を担うのは、公共の授業です。クラス担任になったら、公共の担当と連絡を取り合い、授業の内容をホームルームに持ち込んで振り返る必要があるでしょう。学校での学びがこんな風にオレの将来につながってくるのか、という実感を持ってもらうことで、生徒が力を身に付けていくことができるのです。

まとめにかえて

部活動は、こういった幅広な力の育成に向けては極めて重要です。例えば、チームでひとつの目標に向かって突き進む力は、大人になれば、他者と協働しながら働かざるをえないといった形で必ず生きてきます。こういった活動が特にチームスポーツの中には埋め込まれています。ピンポイントに必要なスキルをのばしていくことと同時に、汎用性のあるスキルを育てているという事実を子どもたちが認識し、自信をもって社会に踏み出していくことは重要だと考えます。

Q.方針を策定する側と現場の乖離が大きいことについてどう考えますか？

出向の仕組みなどで、文部科学省の若手に関しては学校現場を知らない人は少なくなってきています。方針はグローバルスタンダードに合わせる必要など、さまざまな事情を勘案して決まっています。前例のないことをやる大変さも理解はできます。子どもたちにより良いものを提供するために、学校現場と教育行政機関の対話は必要であると考えます。

Q.キャリア教育において、部活動が果たせる役割や必要性、利点はどのようなことだと思いますか？

シミュレーションではなくリアリティがそこにあることが最も大きいと思います。勝ち負け、練習の成果が見えてくること、実感を持って自分たちの努力の成果を体験できる、その機会をキャリア教育に大いにつなげてほしいと思います。

「生徒が成長する部活指導とは」
栃木県立真岡高等学校　サッカー部監督　川上　栄二　先生

真岡高校は明治 2 年に創立された男子校の進学校です。サッカー部は創部 97 年目で、3 年後に百周年を迎えます。全校生徒およそ 600 名中 100 名以上がサッカー部です。「日本一になる」、「全ての大会で優勝する」、「サッカーを通じて地域貢献する」といった夢を掲げています。サッカーのみならずセカンドキャリアにおいても、自分らしく自分の武器を生かして活躍できる人材を育てていきたいと考えています。厳しい道のりですが、決して届かないところではないと思っています。

活動方針としては、「文武両道」、「自立自治」、「オープンマインド」などを意識しています。主体的に考え、自分のため、チームのためと行動できる選手が多くなれば、チームは勝手に強くなると考えてチーム運営を行っています。3 年間のストーリーとしては、1年生では全国レベルを知る、これはサッカーだけではなく学習レベルにおいても同じです。その上で慣れながら経験を積む。2年生では次の年の勝負に向けて事前準備をする、力を蓄える。そして 3 年生が勝負の年です。部の中に8つの専門委員会の活動があります。それぞれの委員会で学年の枠を超えて関わりあい、部の活動をサポートしていくことにしています。

部活動の方針

【夢】
1 日本一になる（将来の日本一のために活動を推進していく）
2 全ての大会で優勝する（常にそのための最善を尽くす）
3 サッカー環境を整備し、地域貢献を果たす
4 日本代表や日本を代表する選手・指導者を輩出し日本サッカー界に貢献する
5 サッカーのみならず、国内外で活躍できる人材を輩出する

【活動方針】
1 文武両道（サッカーの追及と自己実現を見据えた進路実現）
2 自立自治（個々の自立と相互の協働）
3 プレーヤーズ・ファースト（試合に出場する選手を全員でサポートする体制づくり）
4 生涯スポーツ・生涯サッカー（健康で文化的な人生を送るために）
5 オープン・マインド（建設的な議論と主体的実践力の涵養）

【その他】
1 リスク管理～コンプライアンス研修等を通してのガバナンス強化～
2 部内専門委員会（8つの委員会）による部運営への関わり
3 広報誌の発行（真岡カップ協賛者のうち希望する方へ）

部活動の方針

子どもたちに伝えたいのは、自分がどうやってこの部活動に関われるのか、自分を知って、自分をどう集団の中で生かしていくのか、そして生きていくのか、ということを考えることです。全員ではありませんが、学校を卒業してからも、将来自分の目指す職業につくための努力をして進んでくれている子が多いと思います。

そのためのしかけのひとつとして、「NOLTY スコラ フォーゼ」を利用するようになりました。子どもたちを見ていると、彼らは正しい情報を正しく使えているのか、という懸念があります。スポーツの世界では装置で自動的に計測してくれるようなものも増えていますが、手帳にミーティング内容を記録する、日々の成長を確認する、というような機会を設けることで、自分の頭の中でしっかり考えそれを伝えあうことができるようになるという効果が出ていると感じます。

サッカーの神様と言われたペレも、「研究し、探究し、追求することによってつねに正確無比なプレーを追い求める」ということを選手時代に言っていました。私自身もその言葉をサッカーノートに書いていました。これは個人でやることでもあり、チームでもやることだと思います。これが協働という形でリンクしていくと、チームは勝手に強くなっていくと信じています。

自己研鑽とチームビルディングのための研修会

指導の場面でも、例えば試合の中のリスタートについて全部子どもたちに任せるようにしています。自分たちの打ち合わせが試合の結果に直結する、アイデアを持ち寄って考える場面を作っています。勝てなかったときこそがチャンスです。研究し、分析します。何が足りなかったのかどうすべきか、探究、実践、追究の日々です。

ミーティングはたくさんやります。ミーティングをこなしてどれだけ自分たちで解決できるようになったかが勝負のときには大事です。スポーツは、状況が変わっていく中で子どもたち自身が判断をする場面がたくさんあり、そこがおもしろいポイントだと思います。

Q.コーチに対して自分の意見を表現しにくい生徒への関わり方はどのようにしていますか？
コーチも手法を使い分け、意見を引き出すような関わりをしています。個別で話をしたり、生徒がファシリテーターをし生徒同士で意見を言う機会を増やしたりするなど、言いやすい環境を作ることを心がけています。

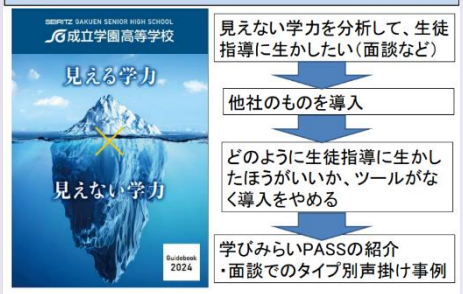
Q.キャリア教育において、部活動が果たせる役割や必要性、利点はどのようなことだと思いますか？
学年の枠を超えての集団形成ができることです。ここに可能性があると感じています。目標を立ててみんなで向かっていくプロセスにいろんな工夫、アプローチの仕方、可能性が考えられます。スポーツはツールであるし、教材であると考えます。

画像はサッカー部 web ページ（https://bukatsunavi.com/page/moka/soccer/）より

「外部アセスメントの活用事例
～部活動をジェネリックスキルの関係性から読み解く～」
成立学園中学・高等学校　進路企画部長　加藤　延幸　先生

成立学園では、高校 1 年生はスーパー特選コースと特進コースの2つに、高校2年生からは志望校・目標別に探究クラス、難関クラス、選抜クラス、特進総合クラス、アスリートクラスの 5 クラスに分かれています。中学からの内進生とは高校2年生で合流します。部活動・同好会は全部で 32 あり、そのうち硬式野球部、男子サッカー部、男子バスケットボール部が強化指定部となっています。

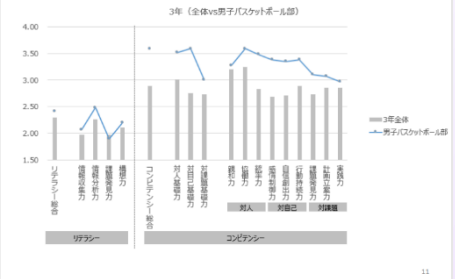
②学びみらいPASS導入のきっかけ



学校の方針として、見える学力と見えない学力を車の両輪として成長させていくことを掲げています。見えない学力を可視化して、どのように見える学力につなげていくか、どのようにすれば生徒指導に生かしていけるかを考え、「学びみらいPASS」の導入を決めました。決め手となったのは、生徒のタイプによる声掛けの例が充実していることで、指導上のポイント、やる気スイッチの洗い出し、面談で確認すべき方向性といった資料を面談で使用しています。

部活動ごとに分析した結果で、男子バスケットボール部は、思考力を示すリテラシーが比較的高く、コンピテンシーを示す行動力が抜きんでて高い、ということがわかりました。一人ひとりの分析結果に関しても、教員の見ている特徴と分析結果が一致していることがわかり、また見えていなかったところについてもさらに今後の声掛けに活用できると感じます。

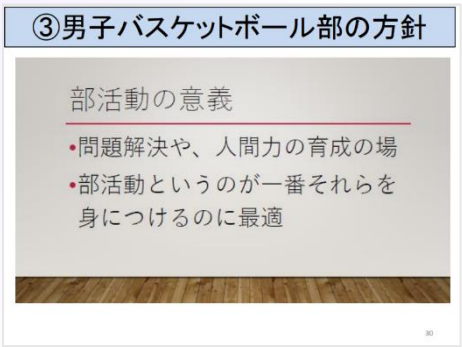
③男子バスケットボール部　状況と分析



男子バスケットボール部に関して、「一体感・仲の良さ」、「学校・他人に関して尽くす行動」、「行事への取り組み」などの良い姿が見られていることを担任なども肌感覚として感じていました。他の強化指定部である硬式野球部と男子サッカー部がアスリートクラスに所属し部活動を重視した生活を送っているのに対して、男子バスケットボール部は一般クラスに所属しています。授業時間も長く難関大学を目指す生徒もいる中、部活動でも結果を出し、文武両立を体現している部活動だと思います。

顧問によると、「仲間のプレーに対して、誰でも誰にでも、言える聞けるチーム」が意識をしている点のひとつだそうです。応援や仲間としての一体感は特徴的だと感じます。70 名を超える部員を擁する中、辞める生徒が非常に少ないです。試合に出られない選手に対してのコーチ・顧問からの声掛けを丁寧にしているとのことでした。また、「感謝を力に」という点もテーマです。人間性の向上と技術の向上は表裏一体であるとよく言われますが、感謝の心をもつことの大切さを理解し成長してほしいという願いを込めてチームスローガンとしています。これら 9 つの TEAM BASIC POLICY を掲げ、それを具体的に行っていくため TEAM PROMISE を定めています。

③男子バスケットボール部の方針



生徒や保護者にも、部活動の意義として、「問題解決能力や、人間力の育成の場」であることを伝えています。問題解決には、答えを出してあげることも必要ですが、じっくり待つことも必要です。リテラシーを身に付けるには、放任も、すべて指示もどちらも NG です。

このような方向性の中で、きめ細かい対応が総合力を身に付けさせることにつながっていると思います。学校として、またチームとしてよりよく成長し、結果につなげていけるよう、「学びみらい PASS」を今後も活用し取り組んでいきたいです。

Q.部活動の顧問と担任の連携について

公式戦などで部活動の様子を見ると、普段担任として感じている問題点が部活動でも出ていたり、逆に部活動ではできている点もあったり、普段できていることが部活動でもいかされていたり、などがわかり、声掛けの材料になると思います。

Q.キャリア教育において、部活動が果たせる役割や必要性、利点はどのようなことだと思いますか？

クラスでの指導は全般的なコメントに、また面談では事後的なコメントになりがちでもどかしい思いもします。部活動はその場で行動が共有できること、問題点・意義・良さをすぐに伝えられることが一番の利点だと思います。